
thye friends

杉の双子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h y e e f r i e n d s

【Nコード】

N 7 9 7 3 X

【作者名】

杉の双子

【あらすじ】

飛んでみたい、どこまでもどこまでも

0 話

いつからか、自分の考えが変わった。

昔、といつても1年前とか2年前とかそんなころの話だけれど気づいたら自分の感情のベクトルの向きが変わっていた。

それは別に良い方向にいったとか悪い方向にいったとかそんなのではない。

自然に、ごく普通にいままでの考えなんて無かったかのように、消えていったのだ。

あと、みんなと過ごすのは短い人で1年。長い人で3〜6、10年ぐらいだ。

10年まで過ごしたというのは限りなく自分に必要な人間だけだとは思うが、あと1年、3年間の間はほとんどの人が一緒。

昔は、それが良かった。樂觀的に考えていて、嫌なことがあるとあと1年〜3年間の間我慢すればいいんだ。それぐらいはできる。良いことがあると、あと1年〜3年もの間過ごすんだ、それまでにいい思い出を作ればいい、それに一緒の高校に行けばいい。そんなことを考えていた。

そんなことは無い。

今、もう別れが一つあった人としては新しい人間関係をはっきり言っただけは無い。

嫌なことがあるほど別れの時は楽しくなる、うれしくなるワクワクだ。

だけど、今はそうじゃない。もうい新しい関係などいらない。作りたくない。仲良くなればなるほど、別れの時がたつくなるだろう？ みんなで一緒の高校なんかにいけるはずが無い。一生合えないことは無いけれど、今までずっと過ごしてきた一緒に過ごしてきた人たちが急に日常から消え、あらなた人間関係ができ、それがまた新たな日常になる。

それが怖いんだ。

今過ごしていることは、どれだけ楽しいことが合っても、その記憶はいつか忘れられる。

怖いよ、とっても。

楽しいことがあればあるほど、みんなにやさしくされればされるほど、うれしいことがあればあるほど、

みんなと別れたとき、つらいんだ。

でも、今いえていることは今が楽しいから。

きつとまたすぐにこんなことは言えないようになるだろうと思う。だけど、それは今の私達にとっては普通なことと、当たり前なことで、誰にでもあることなんだって思うようになって、今はとっても一緒に過ごしている友達とか、とってもとっても感謝している。

新しい出会いが合つてすぐ、こんな子といっている私は少しは変わってはいるかもしれないけれど、別にいいんだ。

自分だって、人間関係でつらい思いはしたことがある。

それはとっても苦い苦い記憶でそれでも今は思い出になっている。

それは私にとっても良いものをあたえてくれて

それは今後の私にとつて悪いものを残してくれた。

消そうとしてもどうしても残る傷跡を、私には見えないみんなの傷跡……。

それを私はどう消していくのだろう。

これはこれは、不思議なお話。

運命って信じているかい？この話を通じて少しは運命って言葉について考えてほしい。

きつと、運命は誰にでもあることだから

ブローグ

私は嫉妬をしている。

誰にでもないあなたに、とても強い嫉妬心を抱いている。

そのことを気づいたのは、少し前のことだけどその思いはどんどん暗闇へ、黒く黒く深く深く染まって、落ちて行く。

『友達の友達は敵』

正論だ、今は本当にそう思う。

昔は、戯言だとかみんなと仲良くすればいいじゃないかとかそんな甘ったれたことを思っていたけれど、そんなことは絶対じゃない。それこそが戯言だと思う。

小学生低学年のころはさ、みんなと仲良くしましょうとか学校の先生はよく言うけれど、高学年ぐらいになると、言わなくなるだろう？
だってあわない人ぐらいいたんまりいるもんね。

そう人と無理に付き合っていたら、自分が壊れてしまう。

今の自分のように・・・

もう我慢しない。

（駄目だよ、怖いよ）

無理に自分を作りたてない。

（今までの自分は何？）

自分をさらけ出せ。

（無理だよ、無茶だ）

猫なんてかぶる必要はない。

いいこちゃんの建前なんて壊してしまえ。

（そんなの・・・今までの私は、）

何だったの？って、自問自答を繰り返す。

いつまでも、いつまでも・・・

私はいつだって優柔不断だから。

新しいクラスの掲示板の前には人がいっぱい群がっていた。

私は、人が多かったから掲示板を見に行くのを、躊躇っていた。

すると同じクラスになった友達が自分のクラスを教えてくれた・・・。

そこまでお節介をかけなくてもいいと思ったが、自分もすこし躊躇っていたので一応感謝の言葉を言っておいた。

まあ、新しいクラスには結構仲のよい友達はたくさんいる方だ。少し満足しているとやっぱり悲しい情報も入ってきた。

親友とは両方ともクラスが離れてしまった。

そう、両方。

親友が二人もいるのはおかしな話だろうか？

2、3年のときにできた親友と5年の時にできた親友。どちらかといえば今は5年の時にできた親友の方が仲良くしている方だ。

私の親友と私の親友の二人はあまり仲が良くない。

仲が良くないなんて言い方をすると、まるで喧嘩をしているように思えるが別にそうでもない。ただ、まだ、あまり関わりをもつて無いただ。

けれど、その親友二人は同じクラスになったようだ。

二人とも早く仲がよくなって三人でいろいろできるかなあ、なんて甘いことを考えていた。

私のクラスは三組だった。

新しいクラスの友達と六年三組に向かっていると、ふと私は思い出した。

私の好きな人のクラスはどこだろう・・・。

と、別にそこまで熱愛していることもなかったなのでその思いはすぐ

にみんなのおもしろい話でかき消されていった。

早くついたので先に席についてほかの人が来るのを待っていると、男子のメンツには少し絶望した。

ださい人、というと少し可愛そうだけれど、かっこいい人というのはまったくいなかった。

そう思うと、親友二人がいる二組がともうらやましかった。

けれどやはり、新しい学年、クラスと言うものには希望を抱いていた。

これから始まる楽しい生活などにとても胸を弾ませていたのだ。それがどんなものになるのかも気づかずに。

そうしているとすぐに始業式は始まった。

校長先生の話が始まる。

うんうん、今年は結構良い年になるかな。

楽しい想像しかできなかったため、校長先生のまじめな話なんて耳には入ってこなかった。

始業式が終わって私は習い事へと向かった。

気づくと、同じ習い事に行っている子はたくさんいた。

自分も結構な量を習っていることは自覚しているが、算盤なんてマイナーな習い事に同じ学年で同じクラスにたくさんいるとは思わなかった。

いや、同じ学年にいる事は知っていたけれど、まさかほとんどが同じクラスになるとは思っていなかったただけだ。

もう12歳。若干誕生日が早いから、自分は学年が上がるとすぐに歳も上がるのだ。

12歳にまでなると、いろいろと女子関係とかややこしくなるとか言うけど、そのまんまだ。

実際に今までややこしかった事はたんまりある。

そんな経験早過ぎないか、ってぐらい。

そんな経験をしてきたからこそ、めんどくさいことには首をつっこんでいないつもりだったんだけど、人から見ると別にそうでもなかったみたいだ。

巻き込まれている、巻き込んでいる、その両方だと思う。

自分はいろいろと考えすぎてるんじゃないか、って思うことだっていつもだ。

こう思ってることさえも、みんなは考えてるのかなって、いつもいつも考えている。

この気持ちは正常なのだろうか、みんなもそう自分と同じ気持ちを抱いているのだろうか、って。

授業中とか1人有的时候はいつもこんな事を考えている。

考え込んでいる。意味も無い、なんにも意味も無いことを。

けれど、しっかり、空気には流れているつもりだ。みんなに合わせて、流れて、みんなと同じことをする。

そうすれば何事も無く事が過ぎていくだろうと、そう思ったから、
そう考え付いたから。

それを実行していた。

「えっ、ななこもう準初段受かったの？やばっうちもがんばらな
いかんやん、もう」

算盤で一緒に座っていた純ちゃんがそう言った。

本当の所、多分受かったのは運だ。

算盤なんか習っていて暗算ができないと言うものほど悲しいもの
は無いが、それは自分だ。

私は暗算ができない。だから段も応用という、文章問題でといってい
るのだ。

純ちゃんの少々上から目線な言葉に少しいらっときたが普通に答え
ておいた。

「うん、たまたま応用があつてさ、うちって結構運があるかも。」
ははっと笑って2人とも算盤の練習問題に取り掛かる。

このごろ、友達の言葉にいらつく事は確かに多くなった。

少しの短い言葉だったとしてもいらついてしまう。我慢しようとし
てもさ、すぐ表情に出ちゃうから、頑張つてセーブしてるんだけれ
ど、時々それがきかなくなってしまうのだ。

算盤塾は、家より少し遠いところにあつた。

だから行き帰りの道のりは少しきつい。しかも。今はまだ春だから、
少し肌寒い。

つめた風が首の横を通り抜ける。気持ちいかもしれない、そう思え
るのはそろばん塾を出てから3分ぐらいの間だ。そろばん塾の中は、
びっくりするほどあたたかいからだ。きっと先生が寒がりなのだろ
う。

急いで帰らなければ、テレビが見れない、そう思い思いつきりペダ
ルをこいだ。

その瞬間、クラスの友達（純ちゃんとその他）が手を振って呼んで
くれた。

「ななこおっばいばいっ」

「うん、ばいばあい」

元気よくさよならの挨拶はした。

そう思えば、今日は親友は来ていなかった。
どうしてだろう。

いつもといえはいつもだけれど・・・

やっぱり親友が来ないというのは悲しい。

風邪でもひいたのかなとも思い、自分は音楽プレイヤーを耳に
いれ、自分の世界に没頭した。

親友の紗和が私の所に飛び込んできた。

一緒のクラスになれなかったねえって、とても残念そうに私には言ってくれた。

紗和は、あまり人との関係を持ってない子で、昔から放課と言えはいつも教室の端っこで本を読んでいるような、そんなポジションの子だった。

それでも結構もてる子で、背もあるし頭もいいし、ただ少し運動神経が残念だったただけだ。

話聞き上手だったから仲良くなったのかな、って思う。

まあ、紗和とは去年クラスと算盤と習字が一緒だったからかなりの時間を一緒にすごした。

ふと気づくと、紗和の後ろには綾もいた。

微笑んではいた。

けれど、何も言っではくれなかった。

気まずい関係までは行っていないけれどこのごろあまり話しては無かった。

三人で話していると、新しいクラスの友達がこっちへ来て私を誘った。

親友とはばいばいをして私は三組へ、二人は二組へと入っていった。クラスでは、いろんな話をした。だれだれが好きだとか嫌いだとか、そんな話ばかりだった。

私はあまりそんなことは気にしていなかったもので、ずっと紗和の事を考えていた。

今度なにして遊ぼうとか、算盤で一緒に座ろうかなとかそんなことだ。

「ねえねえななこはあいつの事どう思う?」

唐突に話が振られて私は少し驚く。

だが、そんなみんなの話など聞いていなかったため、もう一度言ってもらわなければならぬ。

「え？ごめん何が？」

「だからあ、あいつだよ、あいつ。鹿野帆華。」

？。帆華。

帆華といえば、1年生から結構仲が良い子だ。それがどうしたのだろう。

「え、どうしたの？」

「あいつってさ、先生の前ではぶってない？あたしそういうのいらつくんだよね。」

まあ確かに。私もそういうのは大嫌いだ。

先生の前だけでは良い子ぶってる人。

だけど自分もそうだから、あまり人の事は言えない。

でも自分は、先生の前だけじゃないから。友達の前でも内心を隠して伏せて、いつも上っ面の言葉しかしゃべってない、というか話せなくなった自分だから。

あまり人の事は言えないのだ。

「うん、まあそうだよなあ。」

適当に場を流す、それでいい、それが一番いい、そう確信が今では持てる。

大体、今その愚痴を言っている少女自体、私はあまり好いてはいない。だからといって別に嫌いでもない。

元、私はその子にいじめられていたから。

いじめし返したけど。それが駄目だったのかもしれないけれど、逆にそれで今までのギクシャクしていた関係がお互い言いたいことを言い合うことで吹っ切れたとも言える。

だから、今では別に嫌いじゃない。

かといって、紗和じゃない方の親友。綾。

あの子にもいじめられていた。あの子のこともいじめていた。

女王的な存在でさ、今愚痴を言っている少女にからかわれていたん

だ私達は。

だから、最初は私と綾は互いに憎み合つて、死んでほしいとじかにいえてしまうほどひどい状況だった。だって綾が死んだら私はいじめられないですむから、女王様に気に入ってもらえると思つていたから。女王的存在にあげたものは色ペン多数、メモ帳多数……。今から思つと別にたいしたことは無いのだが、昔の私にとっては大出費だった。

結局その後、私と綾、そのほか多数は仲良くなり、女王的存在はいままでいじめを続けてきたばかりにみんなに反感を買つて、沈んでいった。

助けたのはまたみんなだけれど。

別にいいんだ。そんな昔な事。今いえる言い分。

今が楽しく過ごせるなら、昔の事など、どうでもいい。

そう思つてないと、いろいろつらいことが多すぎるから。

だが、みんなの我慢の限界はすぐに来た。

みんなが言うとおり帆華はかなりいらつく。私達の前では愚痴言つてるのに、先生の前ではぶつていい点もらつて、私達はもろ悪役。だから今日から私達は帆華にあだ名をつけることにした。

帆華の前で悪口を言っていたらすぐに気づかれてしまうからね。

ネツシー、そう決めた。

「ななこお、このごろなんかみんな話しかけてくれないんだよねえ・
・・なんでだろ・・・。」

何も知らない帆華が私に話しかけてくる。

別に、とでも言いたいところだが別に何もないよなんて事はない、絶対に。

いろいろあるから、いろんな意味があるから。

「そうかな？みんな普通だと思つよ？」

「そっかあ・・・うつん、ありがと」

華帆は少し、悲しい顔をしながらにも、笑顔を作り私にほほえみお礼の言葉を言った。

普通、ここは心が痛むところだろうけれど、私はこういうところが実際にあまり好きではいなかった。

嫌いでもない、好きでもないけれど。

だいたいいいじめなんてのはやるキャラじゃない。昔、やり返したことはあったけれどそれはやはり直接的なやり方ではなく、ただ単に同じ感情を抱いている子が集まって愚痴を言っていたただけだ。

だから、もうそんなめんどくさいことはしない。自分は。

自分は。その他の人がやっていても私は止めない。そこまでの善者じゃないから、そこまではしようとしない。助けもしない。単調に単調に、言われるが側っていうのにも理由はあるんだよ。

理由があるのに直そうともしない言われる人の手助けなんかはしない、実際めんどくさいただけだが。

「もうさあ、マジ帆華うぜえって、超イラつく」

「なんであいつってあんなにぶってんの？超きもーい」

「男子から聞いたんだけどさあ、あいつってではなくそ食べるらしいよ」

きやははははははは あははははははははははは

女子数人（大勢）の軍団が一斉に笑う。きやははは、あはははと。

ああうるさい。

自分も作り笑いしながらそう思う。

「そんなにうざいなら、しゃべんなきやいいじゃん？あたし自身、もう帆華とはあんまりはなしてないよ？」

言ってしまった。この言葉を吐いたのは自分だ。

本心ではあるが、本心じゃないといえば本心じゃない。

ただ、自分はこの状況を悪化させようとしてこの言葉を吐いたわけじゃない。

少しでもまだ自分の中には良い、清い心が残っていて、帆華の悪口を聞いていたらそう口から漏れてしまったのだ。

弱いなあとか卑怯だなあとか全部分かってます。自覚しています。もはやそれらの言葉は自分のためにある言葉とさえも思っています。弱いとか、自分は弱いです。すぐに逃げます。強がっても私は結局のところなにもできませんから。

卑怯だとか、卑怯でなければ今の私は、卑怯に逃げていなければ今の私はこの世界にはいないだろう。かつこよくいつているけど、ただ単純に今生きてはいないだろうとそんな事だ。

帆華への無視は速攻で始まった。

時に考えるが、無視をするというのはいじめに入るのだろうか・・・。

しゃべりたくない、このことはあまり話をしたくないそう思ったらどうすればいいのだろう。

距離感を置くためにはどうすればいいのだろうか。友達だったら、少しの態度の変化にはすぐ気づいてしまうし、一気に無視というのもどうかと思う。

ああめんどくさいぞ。まためんどくさい事を考えている。

気にしなければいいんだよ。きっと。流せ、この感情は自分が持っているものではない。

この身体は私のものではない。ただ自分が動かしているだけで本当は違うだれかがこの身体には住み着いているんだ。きっと。そう思えばいい。きっと。きっと。

だから私は確信が無い。あるわけが無い。こんな可能性が低すぎる自分の妄想。になんか可能性をかけるほうがおかしいのかも知れないが。

ただ少し、ほんの少しの希望にも夢を見る、そうしないと。

もう、それには慣れたから大丈夫。

へ深く考えるな、そんな時間が有ったら勉強の事を考える、だから

お前にはミスがいっぱいあるんだ。」

前、母が言っていた言葉が脳内でリープ・エンドレスに流れる。何を考えているのだ、私は。

「ねえねえどうする？ 男子もハナクソの事はちよつと引いてたよ？」

「マジ？ 男子にも言ったの？」

「って言うかねえ、男子ももう知ってたよ？ 誰が言ったんだろっねえ？」

「そうなの？ まあ結構みんなの前でもほじってるもんね」

「マジかよ、超うける」

「ってかてかあ、誰が男子にまで言ったの？ 食べるなんてさ、やっぱアノ子そうとうみんなに嫌われてるよねえ」

みんなが一斉に私のほうを見る。

「『『ななこ言った？』』」

数人が私のほうを向いて言う。

いや、言うわけが無いだろう、私はそもそも好きな人意外男子は嫌いだから。

あまり男好きと言う性格ではないから。

「いや、私は言っていないよ、そこまではちよつとねえ」

だよねえ あはは

と、なるが実際みんなは私を疑っているだろう。

目がね。疑ってるんだよ、言ったのはおまえだろうって。

仕方ないけど、今まで帆華と私は結構仲が良いってみんなからは思われていて、前の発言した私の言葉にもみんなは少し驚いていたから。

そうとうな恨みを帆華は買っているとも思われているのだろう。

勝手な想像、おつかれさま。考えるだけ無駄さ、そんなの。

自分も良く考えているけどさ、っていうか今も考えているんだけど。そう思うと私の友達ってなんだろっな、って考えることが多い。

みんなは私といて楽しいと本当に思っているのか、私が言ったことに対して笑ってくれて入るが、それは本当に心の底からの笑みか、

作り笑いじゃないか、とかね。

よく考える。

私は人を疑うのが好きなのかな。

前、先生には人を疑うのがどんなにつらいことかわかるか、人を信じれなくなることがどんだけつらいことかわかるか、と言われた。人を信じる？信じたら負けだ。

私はそう思ってるから。別に良いんだけど。

なんかみんなの私への態度はこのごろ急変してきた。

今年からキャラを変えたせいかな、それともあまり笑わなくなったせいか。

私には本当の事を言えてないのでわなかったと思う。

私の前ではみんな感情を隠して、殺して、私が喜ぶようなことばかりを言う。そんな事ばかり言っても私は友達は平等だと思ってるから無駄なのに。なんて上から目線だなんて思うかもしれないけど、誰でもそうだろう？

みんなから慕われない、そう思うはずさ。

まともな人間ならね。

まともな人間じゃなければ話は別さ。まず常識も通じない。

去年はね、みんなに良い顔して、作り笑顔を振りまくってがんばったさ私は。

今もやっているつもりだけど、それは少しずつ、少しずつ、崩れていつている、この事は親友に言われた。このごろあんまみんなの話に乗らないよね。

て、言われたから。

自分では気づきもしなかったけれど、意外と他人にはそういうところが敏感なんだなってこのときに学習した。

「え？」

私はこんな声を出していた。

帆華が半泣きになっていたそうさ。

泣くってどうして。無視かなんかそんな事であいつは泣くのか。確かに帆華は泣き虫だ。いや、かなり泣き虫だ。きっとそれもみんながイラつくところベスト3ぐらいには入っているだろう。

そんなの泣き虫だからみんなに嫌われるのだろう。

そんなの先生の前でぶっているからみんなに嫌われるのだろう。

自分で、嫌われることをしといて泣くというのはどうかと思う。

それじゃあ自分の感情を押し殺して我慢していた私はどうなるのだ？泣くことでそれは、その我慢は無駄になり、泣くことで今こんなふうになっている空気をどうにかできるのか？って。

聞いてやりたい。だけど、今私がこんな言葉をはいたら、きっと帆華は半泣きどころが大泣きするだろう。

いいところはあるさ、そりゃ人間だもの。

でも悪い、いやちよつとひどいな。みんなから嫌がられる要素が多すぎるただそれだけのことだろう？

直せばいいじゃないか。なぜその性格を直さないのだ。直さないから君の人生はこんな空気に毎回なって、それが大人になってもつながつてエンドレスだ。わからない。学習能力がないわけじゃないのに。

わかんないなあ。だからかかわりたくなる。どうしてこんな空気にまでなってしまったとしても、君は自分の性格で抜きとすんだ。どうして君は直そうとしないんだ。どうして君は泣いているんだ。

「ねえねえどうすんの？さすがに泣かれたらこっちも困るよお。」

「どうする？誤るってのもしゃくだしねえ」

「先生にばれて怒られたらどうする？やばいよお」

「やばいね」

みんながこっちの方を見る。

だからこいつらは。

頼りないんだ。

最終的には私に頼ってくる。

仕方ないか。自分も少しは入ってたのだから。

いや少しって言うのは自分に甘すぎだな。結構かわっているから。今まで頑張って築いてきた先生への信頼は崩したくない。

「うん、帆華のところ行つて来るよ。大丈夫うまくやる。」

結局は私は自分の事しか考えていない。

実際、私がかかわっていなかったら、いくら帆華が無視されていたとしても、先生に集団でクラス全体で自分に問われたとしても、私はたった一言でことを済ませていただろう。

知りませんでした、と。

「ありがとお、やっぱななこ頼りい」

「ななこ先輩、お願いしまする！」

「頑張つてななこお！マジ感謝！」

すぐ上っ面だけの感謝の言葉をいただいてしまった。

いや、今日のは心からの感謝かな。さすがに今日は人のためと言うことで動いているのだから。

きっと今日は本当の感謝だ。私は思い直す。

やっぱり、でも少しだけどうれしいな……。

みんなに頼りにされていること、信頼されていること、心から、感謝の言葉をもらえること。

とってもうれしい。

それがどんな時の信用のされ方だとしても、それがどんな時の信頼や、それがどんな時の感謝の言葉だとしても、私はうれしい。

「帆華、どうしたの？大丈夫？ここはまずいよ。男子達が見てる。

ちよつと上……行こう？」

帆華はぐしゃぐしゃになった髪の毛がまわり付いている顔を上げた。

本当に泣いている。

早くしないと、やばい。

「……うっ、うん」

今にも大泣きしようと言うぐらい、間合いは悪かった。だから私は早く行く。

スタスタと、いくら帆華が歩くのが遅くても。

早歩きで私は向かった。

私と帆華は以外誰もいない、自分達が今いる3階より一階上の誰もいない屋上へと。

『ここからは入ってはいけません』という札を押しつけ、私は屋上へと向かった。

もう、普通に帆華は泣いている。うえうえひくひくと。鼻水をだしながら、しゃっくりをしながら。

こんな状態までに追い詰めていただろう私達は、今はどんな気持ちになればいいのだろう。

罪悪感に身を任せればいいのか、一緒に誤って仲直りのものをすればいいのか。

はつきり言ってどうすればいいかよく分からないのが真実だった。かつこよく屋上までつれてきても帆華にかける言葉なんて一つも無かった。

攻めるのもひどい。誤るのも批難される。

どうすればいいのか。自問自答を繰り返す。

結局の所はただ屋上の端っこで一緒に座っているだけだった。

隣で泣いている帆華には何もしてやれなかった。

隣で泣いている帆華には何もしなかった。

当然のことだ。中立である立場の私はどちらにも何もいえないはずだ。

中立・・・なわけないか。どちらかと言うと無視する方によっている。

そもそもの話、これだけ悩んでいるのに、こんなにも大きな事柄を私は任されているのに、みんなは何もしてくれない。後はななこに任せよう、って。

どうして？ 私にはそんな責任は重過ぎるよ。みんなは何にそんな期待を私に持っているんだ。

おかしいだろ、なんにもできないよ。

みんなはどんな結末を望んでいるのさ、私に何をしてほしいのさ。

そんな事も知らない私なのに任せていいの？どうしてほしいとか先に言つてよ……。

その瞬間一階下の自分達のクラス、三組からみんなの笑い声がした。きつと恋話とかで盛り上がっているのだろう。

その声が聞こえた瞬間、その感情が私の心を埋め尽くした瞬間、私はもう……。どうでも良くなった。

心の荷が下りた。

私はこんなに悩んでいるけれど、みんなはそこまで悩んでいない。ただ単に、私に責任を押し付けたままでだ。

そう思つたらとても気が楽になった。

今まで、どうでも良いとか楽に過ごせばいいとかそんな事ばかり大口たたいていたけれど結局は騙されて、利用されてそんなことが繰り返されるんだ。

結局、結局私はどうすればいいとか、いろんなことを考えて考えて、みんなの事も考えて帆華のことも考えて……。私は結局、……。」「ねえ、雲の流れがすごくはやいよ。すごい、吸い込まれそうだ。」

帆華が口を開いた。

もう泣いてはいなかった。

そのかわり、きっと私は今半泣きになっているだろう。

顔なんて気にしていられなくなっているだろう。

「ねえ、空、見てよ。とってもきれいだよ？」

どうして、私は帆華にひどいことをしてたのに、そんな話をするのかかわからない。どうして怒らないのかかわからない。もっと、怒るなら怒つて。殴るなら殴つて。

どうして優しい言葉を私に贈るのさ。

とっても私には理解ができない。

ああ、私は……。そうか。

「私はさ、なんのとりえもなく運動神経だつて普通だし、頭も普通だし、なにかも普通で、ほんとなんでもない子だったんだ。」

帆華は語りだした、私に言っていない、空を見て言っている。

「だけどさ、お母さん・・・知ってるよね？そのお母さんとかその周りからのプレッシャーとかきたいとかすぐてさ、私はすっごい悩んだんだ。どうすればいい、どうすれば私自身を救えるかって。ずっと考えてた。大変だったよ、そのことについて考えるたんびに私は大泣きしてもちろん一人で泣いていて、助けを求められる人なんて誰もいなかった。つらかった、だから私は先生にこびていい成績をもらうしかなかったんだよ。罰だよ、そんな事するから私はみんなに嫌われたんだ。しかたないよ、それは自分自身が犯した自業自得なんだもの。仕方ない。そう思ったら気が楽になった。」

そういうと帆華はなぜかこっちを見ていった。

「気にやまなくていいんだ、ななこは何もしていない。実際、ななこもそう思っているだろうけど今日私をここに連れてきたのはみんなに言われたからでしょう？全部聞こえていたよ。ああ可愛そうだって、ひどいかもしれないけどそれが私の感想。いつもいつもなにか考え込んでいて、動きがさ、鮮明っていうか考えられてるっていうのが一発でわかった、深入りしないところはしなくて、いつもいいところで降りたり、やめたりしてる。そういうのが私にはわかるんだ。御免ね今私、すごく上から目線で言ってる。」

図星だった。何でそこまで分かるのだろう、そこまで私は表情や行動に出ているのか？そんなに私は芝居下手だったのか？

「どうして分かるの？って顔をしているね。何でかって言うと、私も昔、そうだったから。人に嫌われるのが嫌で、そこまで深い関係とかにはあまりなりたくなかった。だから私は良い子ちゃんぶっていろんな子と浅い友情関係を作りまくって、・・・だから私は昔学級委員とか代表委員とかできていたけど、やっぱりそんなのは駄目で無駄で、今はもうボロボロになって推薦もされずに、立候補しても落ちちゃう結末だよ。そんな結末は追ってほしくない。私の後を追ってこんな思いをさせたくない。ちょっと偽善ぶりすぎているかもしれないけど、本心はただ、今から自分の後を追うと思うと見てられないんだ。」

強い。私はそう感じた。

帆華が言っていることは事実だ。

確かにこのごろ帆華の信頼はものすごく落ちてきている。思っていることも、実現していることも、とても似ていた。

だから言葉の一つ一つにとっても実感がわいたのだ。

「じゃあ、どうするかって言うかね、遊べばいいんだよ。まだ六年生だよ？そこまで深いことを考えずに楽しいことばかりを想像して夢をもつて遊べばいいんだ。そうだろう？」

何も言い返せなかった。

無言、私は今帆華に圧倒されている。

帆華の強さに、帆華の優しさに。

ああ、そうか私は、帆華のやさしさに潰れ込んだのだ。

みんなに、平等にやさしく振舞っている帆華に。

「じゃあ私は行くね。今日の所は早退するよ。今から教室に戻ってぴんぴんしてるとさすがにみんなも驚くだろう？だから、」

じゃあね、と帆華は、私にくるりと背を向け、階段を駆け下がっていった。

私は寝転がった。

疲れたなあと、みんなも結構考えているんだ、とまた学習した。

こんなことを考えているのは私ばかりじゃない、少しは安心したけれど、また不安な気持ちにもなった。

今、なっていた出来事はものすごく短い出来事だけど、帆華にとつてはものすごく長い出来事だったろう。無視はつて、全部聞かえていたのだから。

一発やられたな、だから私はまだガキだ。あんなに深く考えていたのに、やっぱりどこかでは甘い気持ちが合ったのだ。思いにはまらなかったけれど、昔の一年生ぐらいのころの気持ちだってまだ私の中には残っていたのだ。

「あああああああああああああああーーーーー」

「！！！！！！！！！！」

私は大声で叫んでいた。理由も無く、ただただ衝動的に。

床に転がっていた体を私は勢いよく飛び上がらせた。

本当に結局はこんな結末じゃないか。深く考えすぎだろう私は。

だけど、そんなことを言われても私は考えることをやめないだろう。考えることだって良いことだから、それによって生まれる新たな感情や気持ちだつてあると思うから。

いままでの私を否定したくないから。

空は、ものすごく広がった。とても青かった、雲もとても大きかった。

すごい、広い、とても当たり前なことだけれど、今更だけど、なぜか感動した。

西のそらには白い月もあった。

さあ、がんばるぞ、明日からも。まだ先は長い。

これからは、どうやって帆華を元の位置に戻すかだ。

頑張るぞ、帆華のためじゃない、私のためでもない、昔の私のゆるぎない気持ちのために。

頑張つてやる。やり通してやる。

待っている、みんな。

待っている！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973x/>

thyye friends

2011年12月16日19時49分発行